

高橋健二

作家の生き方

シュトルム カロツサ ケストナーの場合



読売選書
21

著者紹介

1902年東京生まれ、1925年東大独文科卒業。
中大教授、日本ペンクラブ副会長、日本翻訳
家協会会長。訳業には『ヘッセ全集』(14巻)
『ケストナー少年文学全集』(8巻)、『グリ
ム兄弟』(1969年度芸術選奨文部大臣賞)、著
作には『ヘッセ研究』(1958年度読売文学賞)
など。1969年、日本芸術院賞受賞。

読売選書 21

作家の生き方

昭和四十七年十一月十日 第一刷

著 者 高橋 健二

発行者 松田 延夫

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二一〇〇
大阪市北区野崎町七七五三〇
北九州市小倉区明和町一の二一八〇二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定 価 六八〇円

©, KENJI TAKAHASHI, 1972

目次

シュトルムの場合	三
カロツサの場合	七
ケストナーの場合	一七
あとがき	二四三

装丁
栃折久美子

シュトルムの場合

シュトルムと毛沢東

毛沢東がシュトルムの『みずうみ』を愛読していることを、ドイツのテレビで知った時、私は少なからず驚いた。女性的に感傷的で、線が細く、地方的に狭い市民社会をスケールの小さい短中編に書き続けたシュトルムと、大きな中国の大きな革命を成しとげた偉大な政治的指導者、毛沢東とは、およそ最も縁遠いもので、この二人が結びつくということは考えられなかったからである。私だけでなく、私からその話をまた聞きしたドイツ人はみな、肩をすくめ、半信半疑の驚きの笑いを浮かべた。

しかし、それは固定した先入観にとらわれた考えであつた。人間の心は、そしてそこから産み出される文学は、測り知れない微妙な働きをすることを、私は思い知らされた。シュトルムと毛沢東との結びつきという、意外なハプニングのように好奇の目で受け取られたことも、よく聞いてみれば、なるほどとうなずかれた。

その話を伝えたのは、アンネリーゼ・マルテンス (Anneliese Martens 1907-) というドイツの女性で、『私はマオ(毛)のために戦った』(一九六四年)という実録を書いている文学博士であるから、十分根拠があるものと考えられる。彼女は、米中会談をつないだポーランド駐在大使王炳南夫人であつ

た。王アンナという中国名をペンネームにしている。その書名の通り、中国革命のために戦った人であるから、毛沢東のことも身近によく知っている。一九五五年に郷国ドイツに帰ったが、五九年にはまた中国に行つて、著書のための資料を集めた。右記の著書には毛沢東個人のことも直接の知識にもとづいて詳しくしるされているそうである。

それによると、毛沢東は外国に行つたことがなく、外国語もできないが、外国の制度、文物を知ろうとする意欲は強く、博読家として知られ、西欧の文学書や歴史書を翻訳で読破している。延安の毛沢東の部屋にシュトルムの『みずうみ』の訳書があるのを見た時、彼女はいくらか驚いてたずねたところ、毛主席は、『多くの中国人のように、自分もインメンゼーが好きだ。』と答えたそうである。

なぜ毛沢東はシュトルムが好きなのだろうかという問いに対し、マルテンス女史は、シュトルムの風景描写が特に気に入っているようだ、と答えている。すぐれた詩人でもある毛沢東が、本来自然感の豊かな叙情詩人シュトルムに共感を寄せたとしても不思議はない。それに彼がシュトルムの訳書を持っていたことも決して不思議ではない。叙情的で無常感をたたえているシュトルムの作品は、中国でもたくさん翻訳が出ている。『みずうみ』『マルテとその時計』のような初期の短編から、『聖ユルゲンで』や『三色すみれ』や『水に沈む』など五十歳代の名作を経て、『告白』『白馬の騎手』など晩年の力作に至るまで、まんべんなく訳されている。したがって、大衆政治家である毛沢東がそれらを持つているのは、十分あり得ることである。

一九六七年九月十四日から、その生地西独北端のフーズムでシュトルム生誕百五十年祭が催された

時、招かれて行った私は、シュトルムについて多くのことを聞かされたが、やはり毛沢東のことが一ばん強く印象に残った。私にはよく正体のわからない文化大革命であったが、その主導者が、日本の中学生女学生を含め、われわれと同じように、シュトルムの愛読者であるということは、何か驚きと同時に安心を感じさせた。

シュトルムとツルゲーネフ

シュトルム生誕百五十年祭で同様に強い感銘を受けたのは、ツルゲーネフがシュトルムと親しく交わったことである。シュトルムはバーデン・バーデンのツルゲーネフの宿に八日も泊まり、前後十二年間も文通している。『獵人日記』や『父と子』などの名作で私たち日本人にも強い刺激を与えたロシアの偉大な文豪が「静かな金細工師」のような小型の作家シュトルムを進んで招き、著作を交換し続けたのである。これも意外な感じを与えることで、シュトルムという作家を見直させる契機になる。

シュトルムとツルゲーネフとの関係については、すでにトーマス・マンが一九三〇年クナウル版『シュトルム著作集』の序文として書いた内容豊かなシュトルム論を、ツルゲーネフとの出会いから書き起こしているので、私も知らないではなかったが、百五十年祭を記念して出版された『シュトルムと

ツルゲーネフ』(K. E. Iaage, Theodor Storm und Iwan Turgenjew) をもらって、両作家の並んでいる写真を見、両者の交渉の詳細を知って強く興味をそそられた。この本はシュトルム協会の事務局長をしているラーゲ博士の著作で、両作家の「個人的、文学的關係、影響」を詳述し、保存されている手紙の全部と、十七枚もの写真を収め、綿密精確な注をつけている。まことに行きとどいた研究出版である。このラーゲ氏の父が一九四八年にシュトルム協会を創設し、一九五二年から年鑑の形で *Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft* を出している。ツルゲーネフとの關係を扱ったのはその第十六卷(一九六七年)に相應する。K・E・ラーゲ氏は高校の教頭を勤めながら、六五年に死んだ父の跡をつぎ、シュトルム協会の運営を一身に引き受けている。親子二代、シュトルムの研究とその著作の普及に献身している。私は、ツルゲーネフがシュトルムに寄せた敬愛の念に心を引かれると共に、ラーゲ氏が郷土の詩人に傾けている熱意に心を動かされた。息の長い献身は常に美しいものである。シュトルムの生涯を貫いていたものもそれに他ならない。

シュトルムは一八一八年、ドイツ北部のシュレスヴィヒ・ホルシュタインに生まれ、八八年、生地近くで死んだ。ツルゲーネフは一八一八年、中央ロシアに生まれ、八三年、パリ郊外で死んだ。先年、一年ちがいで、両作家の生誕百五十年祭がそれぞれの生地フーズムとオリョールで盛大に行なわれた。

シュトルムはいなかの弁護士を振り出しに、二十八年間も司法官を勤め、三男五女の父として、地味に、時には細々と生計を立てながら、こつこつと詩や短編中編を書き続けた。ツルゲーネフは若いころ母のお針女に女兒を産ませたが、その後はフランスのオペラ歌手ヴィアルドーを思い続け、内務

省勤めは一年余でやめ、一生独身で過ごし、貴族地主としての財力で西欧を再三旅行し、ドイツにも長く滞在し、その間に問題の長編をいくつも書いた。二人はまるで異なった生活をした。

作家としても、銀線細工師とも言われたシュトルムは、ツルゲーネフのように、偉大な文豪と呼ばれる型の作家ではない。孤独で静かにつつましく小さく完成されたものを書いた。しかし、両者に類似点もあった。トーマス・マンは、全く兄弟のように似ている、とまで言っている。パリの文人たちはツルゲーネフのことを「やさしい巨人」(doux géant)と呼んだそうだが、その呼び方ならシュトルムにもあてはまるかもしれない。魅惑的なトニオ・クレীগーの父の中には、シュトルムとツルゲーネフが溶け合っている、とマンは書いている。

たしかに、叙情的なムードの美しさ、回想の悲しさ、無常感と諦念というような点で、両者には共通点がある。両者が互いに興味を感じ合ったとしても不思議はない。シュトルムはベルリンで一八五四年(単行本『みずうみ』の二年後)、『獵人日記』(『みずうみ』と同年刊行)のフィデルトのドイツ訳の出版を斡旋している。おそらくドイツで最も早くツルゲーネフを認めた作家であろう。

他方、そのころベルリンにいた肖像画家で文士のL・ピーチュはツルゲーネフに心酔して熱烈に礼賛してまわった。シュトルムもピーチュによってツルゲーネフ熱をかきたてられた。十年ほどたって、シュトルムは故郷フーズムに帰れて、喜んだのもつかの間、その翌年、一八六五年、愛妻コンスタンツェを産褥熱に奪われた。七人めの子どもが産まれたところでもあり、家庭的なシュトルムは名状しがたい打撃を受けた。その痛手を忘れるため、休暇をとって大きな旅行をしたいと考えた。たま

たまそれを知ったピーチュが、ドイツ南部の国際的湯治場バーデン・バーデンに前年からヴィアルド一家と共に滞在していたツルゲーネフに事情を話した。ツルゲーネフも『みずうみ』などを知っていたので、自分のところに滞在するように招待した。『貴族の巢』『ファウスト』などを読んでツルゲーネフへの興味を深めていたシュトルムは、喜んでその招きを受けた。

ツルゲーネフはフランスでもドイツでも有名な作家たちと好んで交わっていたので、気軽に招いたのであろう。シュトルムは六五年九月五日から十三日までピーチュと共に、『けむり』を執筆中の文豪の客となった。彼はツルゲーネフを「自分の会った最も美しい人の一人」といい、「いくらか親しみにくい、きわめて親切だ。」と言っている。だが、北方の灰色の町の非社交的な詩人は、豪華なバーデン・バーデンの雰囲気と、名歌手ヴィアルドのマチネーに集まってくる王侯貴族にとりまかれたツルゲーネフに、心から親しむことができなかった。それはシュトルムの世界と全く異質なものであった。ツルゲーネフが最も社交的に活発な西欧人であったのに対し、彼はあまりに小都市の北ドイツ人でありすぎた。歌のすきなシュトルムがヴィアルドの歌を得意のテノールで歌って、彼女から「ブラヴォー、シュトルムさん」と言われたのが精一杯であった。

バーデン・バーデンでの直接の交わりは、かえってツルゲーネフに対するシュトルムの気持ちを持て余させたようである。著書の交換と文通は十年以上も続いたし、作品に対し相互に認め合いもしたが、小説技術にかけては、ことにツルゲーネフはシュトルムの作品に対し、「詩的香氣」を高く評価しながらも、例えばその代表作とされる『水に沈む』などに対し批判的であった。知り合っても、迎

合的にならなかったのは、作家の主体性を示していて、おもしろい。非妥協的で、トルストイと十七年間も絶交し、ドストエフスキーとも衝突したツルゲーネフが、シュトルムにだけ微笑を続けたとしたら、かえっておかしいであろう。

しかし、二人のやさしい巨人の触れ合いは、やはり美しい文学上の語り草であり、トーマス・マンの傑作の中に生き続けているのは偶然でない。

海辺なる灰色の町

シュトルムは、センチメンタルで女学生むぎの小説家と考えられがちであるが、そうでないことは、ツルゲーネフや毛沢東に愛読され、トーマス・マンに高く評価されていることによっても明らかである。特に注目されるのは、共産圏に属する東独でも読者が多く、シュトルム全集が相ついで出ており、その伝記も二冊刊行されている。諦念色の濃い非政治的な自由主義者は、普通ならマルクシズムの国で最も排斥されるのであるが、シュトルムが珍重されるのは、やはり作品の魅力であろう。

その作品は甘い叙情と感傷的な回想とを主調としているにちがいないが、作者はきびしい現実に通して生きぬいた強い意志の持ち主であった。

その感傷は、月並みな表面的なものでなく、現実の生活に鍛えられたものであった。彼の生活は、

多くの作品から浮かび出てくるようなほのぼのと柔らかいたそがれの雰囲気に含まれていたのではなく、故郷を政治的に追放され、薄給の裁判官として片いなかで暮らし、冬は燃料の乏しいため、居間だけをあたため、多勢の子どもにかこまれながら、書類を調べたり、小説を書いたりしたのである。あのやさしい短編を書いた人は、実は強情なまでにしんの強い人であった。そして、貧寒なドイツ北部の風土と、流離と耐乏の生活が彼をしてあのような作家にしたのである。彼自身それを認めている。

シュトルムの七十回めの誕生日が、六十八人もの客にかこまれて行なわれた時、彼は、作家になるには恵まれなかった環境を沈痛に回顧しながら、かえってそれに感謝した。「若い馬は、それがなり得るものになるためには、乏しい飼料をあてがわれなければならない、と言われます。それは、人間にもあてはまるでしょうか。そうだとすれば、文芸にかけて私はその点で幸福でした。」と彼はあいさつしている。作家として彼は乏しい飼料をあてがわれたことをむしろ幸福だとしているのである。彼は作品の中で好んでばらの花を描いているが、彼は決してばらの花園におい立ったのではない。

テオドル・シュトルム (Theodor Wolsen Storm) は、一八一七年九月十四日、ドイツでは北のさいはての「海辺なる灰色の町」フーズム (Husum) に生まれた。今でも「海辺なる灰色の町」と言え、ああシュトルムかとうなずくドイツ人が少なくない。『町』 (Die Stadt, 1852) という簡単な題名でシュトルムが故郷を歌った詩は、郷土の感じをよく伝えていると共に、叙情詩人シュトルムの代表的な詩でもあるので、全訳をかかげておこう。

灰色の浜辺、灰色の海辺

そのかたわらにあの町がある。

霧が重く屋根屋根をおしつけ、

静けさをつらぬいて、海が

町をめぐるって単調にどよめいている。

風にざわめく森もなく、五月にも

鳴きしきる小鳥さえない。

空を渡るがんがかん高く叫んで

秋の夜に飛びすぎるだけだ。

浜辺では草がそよいでいる。

だが、私の心はひたすらおまえを慕う、

おまえ、海辺なる灰色の町よ。

若い日の魔力がいつまでも

ほほえみつつおまえの上に宿っている。

おまえ、海辺なる灰色の町よ。

そのフーズムのうら悲しい情調を最もよく描いている中編『聖エルゲン』(In St. Jürgen. 1867)は「私の生まれた町は、飾りのない小さい町にすぎない。木のない海浜の平野にあって、家々は古く暗い。しかし、私はいつもそれを快い土地と思った。」と書き起こされている。色彩に乏しい、見ばえのしない町だが、愛着を寄せずにはいられたのである。

一九六七年に私が二度めにフーズムを訪れた時、人口三万ほどのこの町にも、昔なつかしい旧市街のまわりに、近代的な大きなホテルや、堂々たる郷土博物館が建ち、ドイツの小都市らしい充実ぶりを感じさせたが、一九三一年に初めて訪れた時は、いかにも灰色の町らしく貧寒な印象を与えた。それより百年以上前のシュトルム出生のころは、彼自身が歌に描いている通りであつたろう。海は近いが、堤防にさえぎられて、開けた明るい見はらしはない。暗い陰気な沼沢地帯の単調さ、それが北海沿岸のフリースラント人を陰うつにがんこにねばり強くする。シュトルムの最後の大作『白馬の騎士』(Der Schimmelreiter. 1888)に悲痛に描かれているように、このあたりの人は北海の非情な自然力とたえず戦わなければならないからである。

こうした風土に生まれたことが、シュトルムにとって宿命的であつたと共に、郷国の政治的歴史的情况も彼を荒波の中に投げこむことになった。

受け身の自由主義者

結局、シュトルムは非政治的にとどまり、「受け身の自由主義」より以上にはならなかったが、デンマーク政府の強権によって「所帯と故郷から追われ、乞食して歩かねばならない。」と『一八五〇年の秋』(In Herbe 1850)という詩で沈痛に歌っているような苦境を体験したのである。それはすべて彼の郷国の歴史的現実にもとづいていたことであつた。

フーズムはデンマークとの国境から五十キロくらいしか離れていない。ドイツが二度の大戦に敗れたため、この地方の帰属はあやうかつたであるが、今はドイツ連邦共和国(西独)の一国(州)シュレスヴィヒ・ホルシュタインとして、住民が望んだ歴史的な一単位をなし、安定した状態にある。フーズムはこの州の北から二ばんめの郡庁所在地である。

シュレスヴィヒとホルシュタインは十五世紀にデンマーク王の支配を受けるようになってからも、「永久に不可分」と認められ、本質的にはドイツ住民の自主独立が保たれていた。ところが、ナポレオン失脚後の政治的処理をしたヴィーン会議で、南半分のホルシュタインだけがドイツ連邦の一部と認められた。それでデンマークは北半分のシュレスヴィヒを引き離してデンマーク領に入れようとした。そのため、ドイツ国民とデンマーク国民との間に激しい抗争をまきおこし、グリム兄が一八四八